

題目 学級経営におけるS S Tの活用に向けての一考察

指導教官 山口 健二
発表者 中島 光代

I 題目設定の理由

近年、子どもたちの環境の変化に伴い、対人関係の希薄化やいじめ、学級崩壊、不登校、突発的暴力、児童虐待などの子どもに関する問題が大きく取り上げられている。その裏には問題行動を起こしたり心の病になる児童も多い。不適応や問題が生じてからの個々に対する対策ももちろん大切だが、教員の仕事量の増加や「荒れ」の拡大が呼ばれる昨今、その方法だけでは限界を感じた。そこで私は、「学級」で「すべての児童に」できるその前の予防策に着目した。その中でも、不適応や問題が生じる前に、子どもたちの対人関係や自己意識の発達を促し、感情統制力や表現力を育成するよう働きかけることで、不適応や問題が生じる可能性そのものを小さくしようという予防的・開発的なソーシャルスキルトレーニングを用いることによって児童自身のソーシャルスキルが育成され、学級間の仲間関係の向上につながるのではないかと考え、本題目を設定した。

II 論文構成

第1章 ソーシャルスキルトレーニングの概要

第1節 ソーシャルスキルとは

第2節 ソーシャルスキルトレーニングの歴史

第3節 子どものソーシャルスキルトレーニングの諸技法

第2章 学校で行うソーシャルスキルトレーニングの実際

第1節 学校で行うソーシャルスキルトレーニングの対象別介入方法

第2節 学級単位のソーシャルスキルトレーニングの利点と課題

第3節 コーチング法を用いた典型的なソーシャルスキルトレーニングの手順

第3章 ソーシャルスキルトレーニング実践校における取り組み

第1節 富山県総合教育センターの実践

第2節 愛媛県今治市立常盤小学校の実践

第3節 青森県総合学校教育センターの実践

第4節 岡山県真庭市落合小学校の実践

第4章 ソーシャルスキルトレーニングのあり方

第1節 調査結果を受けての考察

第2節 ソーシャルスキルトレーニングの意義

III 論文の内容

〈第1章〉 ソーシャルスキルトレーニングの概要

本章では、ソーシャルスキルトレーニング（以下S S T）の概要についてまとめた。

ソーシャルスキルの定義は非常に多く提案されているが、いまだ統一的な定義がないのが実情である。なかでも、相川充（2002）の社会的スキル（＝ソーシャルスキル）の定義は、社会的スキルの生起過程をうまく表現しており、社会的スキルの定義としてもっともコンセンサスを得やすいものであるとされている。相川の社会的スキルの定義は、以下のとおりである。

- ①社会的スキルは、具体的な対人場面で用いられるものである。
- ②社会的スキルは、対人目標を達成するために使われるものである。対人目標とは、当該の対人場面から手に入れたいと思う成果のことである。
- ③社会的スキルは、「相手の反応の解読」または「対人目標の決定」に始まり、「対人反応の決定」や「感情のコントロール」を経て、「対人反応の実行」に至るまでの認知過程および実行過程のすべてをさす概念である。
- ④社会的スキルは、言語的ないしは非言語的な対人反応として実行される。この実行過程が他者の反応を引き起す。
- ⑤社会的スキルについての他者からの評価は、主に実行過程に関して、効果性と適切性の観点から行われる。
- ⑥社会的スキルは、他者の反応と自分自身の反応をフィードバック情報として取り入れ、変容していく自分と他者との相互影響過程である。
- ⑦社会的スキルの各過程は、具体的に記述することができ、また、各過程の不足や過多、あるいは不適切さは、特定することができる。
- ⑧社会的スキルは、不慣れな社会的状況や新しい対人反応の実行時には、意図的に行われるが、熟知した状況や習熟した対人反応の実行時には、自動化している。
- ⑨社会的スキルは、社会的スキーマの影響を受ける。

以上のようなスキルを身に付けるための訓練が、ソーシャルスキルトレーニング（以下S S T）である。

S S Tの諸技法には、強化法、モデリング法、仲間媒介法、コーチング法、社会的問題解決スキル訓練などがある。

〈第2章〉学校で行うソーシャルスキルトレーニングの実際

本章では、実際に学校現場でSSTを行う際、誰を対象として、どのような手順で指導していくのかを述べた。

学校で行うSSTの対象別介入方法としては、グローバル介入・セレクティブ介入・インディケイティッド介入・治療的介入がある。なかでも、グローバル介入は、特定の子どもを対象とするのではなく、学級の子どもたち全員に社会的スキルを指導するやり方であり、集団全体の社会的スキルレベルを高めることを主な目的として実施するもので、学校現場などでよく取り上げられる。この介入方法は、学級集団全体がスキルを学習しているので学習したスキルを強化する機会が多い点や、学級担任教師が介入の主体となる場合授業外の場面でも般化を促せる点などから、定着化が期待できる。また、学級集団介入では、小集団介入のように、ある特定の子どもを抽出して学級の仲間と切り離した介入を必要としないので、ステигマの問題を回避できる。また、学級集団介入は、学級全体の子どもを対象とするのでコスト効果が高く、学級集団介入によって、学級全員の子どものメンタルヘルスが向上すれば、後の社会適応上の問題や行動上の問題の発生を予防することができると考えられている。

〈第3章〉ソーシャルスキルトレーニング実践校における取り組み

本章では、SST実践を行った富山県教育センター、今治市常盤小学校、青森県総合学校教育センター、岡山県真庭市立落合小学校の取り組みについてまとめた。四校の研究から、SSTを行うことで児童のソーシャルスキルが向上することが証明された。次に、SSTの実施は学年が早い段階から計画的に行うことが効果的であることが予測された。また、自分から良好な人間関係を築けない児童に対してその原因を児童自身の性格や家庭環境、生育暦などに求める傾向が強かった教師たちが、スキル不足やスキルの未熟さに原因があるとするようになり、そのような児童への対処法を具体的に考えることができる教師が増えてきたとある。このことから、SSTを用いることで教師の意識を変化させ、ソーシャルスキルが未発達な児童に対して適切な指導を行うことができると考える。また、小学校低学年の児童にSSTを行う際に、感情の表現がまだ難しいことを考慮して、何らかのモデリングの工夫をすることで、より効果的にSSTを行えることが分かった。

〈第4章〉ソーシャルスキルトレーニングのあり方

本章では、第3章の研究から、SSTの効果的な活用について論じた。

第3章の研究から、SSTを行う際、長期的に行うことと、般化を十分に行なうことが、SSTの効果に大きな影響を及ぼすことが分かった。また、SSTを効果的に行なうためには、早い学年から計画的にSSTを行うこと、般化のために他の教師の意識の変革が重要であることもわかった。

よってSSTを学級で用いる際の注意点として、2つのことが考えられる。それは、より効果的にSSTを行なうために、学校全体で長期的にSSTを行なう必要があることと、小学校低学年は発達段階的に感情を表現することが難しいという側面から、感情を表したカードを用いて児童に感情を表現させるなど、モデリングの工夫を凝らす必要があることである。

IV 今後の課題

本論文では、SSTを学級で行うことにより、児童のソーシャルスキル定着度が上昇することがわかった。しかし、SSTを用いることで学級の状態を良くすることができるかという点については、はっきりとした見解を示すことができなかった。

今後の課題としては、SSTを長期的に用いることで学級の状態の向上を促すことができるのかを明らかにしていきたい。

また、学級で行うSSTは、予防的・開発的であり、いじめや学級崩壊などの学校問題の予防や対処法の一端に過ぎない。SSTは児童一人一人のソーシャルスキルの育成であるため、それを用いることのできる仲間づくりなどの取り組みと合わせて行なうことで、より効果的にSSTを用いることができるよう工夫していきたい。

V 主要参考文献

- ・『学校における SST 実践ガイド』 佐藤正二・佐藤容子編,2006
- ・『子どもの社会的スキル訓練』 J・L・マトソン/T・H・オレンディック,1988
- ・『実践！ソーシャルスキル教育』 佐藤正二・相川充編,2005
- ・『児童の社会性に関する研究調査（第1報）－小学校低学年における社会的スキルの育成－』,研究紀要 21号,2003
- ・『あたたかい人間関係を形成・維持する学級経営の在り方－ソーシャルスキル・トレーニングを通して－』,愛媛県教育センター研究紀要,2005
- ・『小学校高学年における人と関わることの楽しさを実感できる集団作りに関する研究－ソーシャルスキルトレーニングの実践を通して－』,青森県総合学校教育センター研究紀要,2004
- ・『ソーシャルスキル教育における効果的な支援のあり方に関する一考察』真庭市立落合小学校教諭瀬島公彦,岡山県教育センター研究紀要,2004